

存在論的多元主義の可能性  
The possibility of ontological pluralism

稲田 進一

**Abstract**

This paper aims to clarify the stipulation and the position of K. McDaniel's 'ontological pluralism' in modern metametaphysics, and to indicate the better direction of it. Ontological pluralism is stipulated as the position that there are multiple analogical categories on the fundamental level of the world, distinguished from 'ontological monism', which admits only one category. My proposal is that the focal point of the disputes about ontological monism and pluralism is not on the linguistic level, but ontological level, and that ontological pluralism is not inferior than monism at present. Furthermore, I propose that ontological pluralists need to explicate the notion of 'analogy'.

**(1) 研究テーマ**

本研究のテーマは、現代メタ形而上学における一つの立場である、存在論的多元主義 (ontological pluralism) の可能性を探ることである。現代メタ形而上学において存在論的多元主義と呼ばれる立場は複数あるが[注1]、本研究が取り上げる存在論的多元主義は K. McDanielによって提示されているものであり[6]、その存在論的見解としての要点を一言で表せば、「存在 (being) の種類および基礎的な存在者の領域は複数ある」というものである。現代の分析形而上学では、「存在の種類および基礎的な存在者の領域は一つである」とする一元主義的立場が主流派の立場の一つの特徴であり[10][13]、存在論的多元主義はこれと対立する非主流派の立場であるといえる[7]。分析形而上学においては従来、客観的世界のあり方を明らかにすることが形而上学の目的である、とする見解が暗黙裡に共有されてきた感があり、近年T. Siderによって「客観的世界の基礎的構造の探究」としての形而上学観が強く打ち出さるとともに[11]、それはまた多くの批判も招いているが[7][12]、そのような主流派の立場からすれば「世界の基礎的な存在者の領域が単独か複数か」ということは世界の基礎的あり方に関わる大きな問題であり、十分に検討を要する問題であると言える。

ただし、現在のメタ形而上学の議論は非常に錯綜しており、上述の存在論的多元主義の規定・整理も実際にはもう少し複雑であり、さらなる説明・整理が必要である。したがって、本研究ではまず存在論的多元主義の規定をT. Sider[10]やJ. Schaffer[9]などの存在論的一元主義やE. Hirsh[4][5]の立場と比較しつつ整理し、その上で存在論的多元主義の課

題と可能性について考察する。

## (2) 研究の背景・先行研究

近年、分析形而上学の主流派に対して厳しい批判が起こり、「形而上学とは何か？」を問い直すメタ形而上学的議論・整理が盛んになってきている[1][2][7][12]。現代メタ形而上学における多種多様な論点のうちの一つが、「基礎的な存在者の領域は単独か複数か」という点であり、T.SiderやJ. Schafferなどの主流派は「単独である」という一元主義的な立場をとり[9][10][13]、それに対してK. McDanielは「複数である」という多元主義的な立場（存在論的多元主義）をとる[6]。しかし、この一元主義と多元主義の対立と、それを取り巻く状況の説明にはもう少し整理が必要である。

まず、分析形而上学に一般的に見られる傾向として、存在の問題とそれを記述する言語・理論の問題を平行に考える、という傾向がある。特に、W. O. Quineの提出した存在論的コミットメントの基準（ある理論がある対象の存在にコミットする＝その対象がその理論の束縛変項の値となる）[8]に従って、最良理論における束縛変項の値となる、つまり量子子のドメインの中にあることを対象の「存在」の条件とする、という考えは主流派形而上学において根強い。そのような流儀に従って、上記の存在論的一元主義と存在論的多元主義の対立も「最良理論における基礎的な量子子の種類は単独か複数か」という対立に帰される形になっている[7][12]。

上述のように存在論的一元主義と存在論的多元主義の対立が論じられているのであるが、広義の存在論的多元主義にもいくつかのヴァリエーションがあるため、ここでMcDanielの多元主義[6]をE. Hirshの立場[4][5]と比較することは有益である。現代のメタ形而上学において、基礎的な量子子の意味が一義的（univocal）かそうでないか、という対立軸があるが[7][12]、主流派とされるSiderやvan Inwagen等の立場[9][13]は一義的であるとし、E. Hirshは一義的ではないとした[注2][4][5]。例えばSiderは、形而上学的な意味で単独最良の量子子の意味があるとし、それは実在の構造を正しく切り分けているとして、「何があるのか」「世界の基礎的なあり方はどのようなものであるのか」という問いに答えようとするのであるが、HirshはSiderのような形而上学的に特権的な単独の量子子の意味を認めず、複数の同等な量子子の意味がありうるとするのである。この「量子子に複数の意味を認める」という点においては、McDanielのような存在論的多元主義者とE. Hirshの立場は共通する。しかし、以下の二点において両者は異なる。第一に、Hirshは主流派のようにクワイン的存在論的コミットメントの基準に従って「最良理論における量子子のドメインが世界の基礎的レベルでの存在領域に対応する」そして「（基礎的なレベルで）何があるのかはその存在領域のうちにあるか否かで決まる」という立場を明示的にはとる訳ではないが、McDanielはSiderと同様にそのような立場をとる。第二に、Hirshは複数ありうる基礎的な量子子の意味について単に多義的である（あるいは言語ごとに異なる）としているように見えるが[4][5]、McDanielは多義的な量子子の複数の意味の間に、類比的な（analogical）意味連関を認める[6]。

筆者が再整理するところでは、McDanielの言う「類比」あるいは「多義（polysemous）」とは、多義的な意味連関を有する語のうちに成り立つ性格であり、総

称的な意味 (generic sense) を有する語について言われるものである。つまり、同一の語として使用されてはいるが、基礎的なレベルでは互いに連関する多義性を有する語について言われるものである。McDanielは[6]においては「類比」あるいは「多義」という意味連関の内実については深く述べていないのが、これと区別されるものとして、「一からの異義 (pros hen equivocal)」と、「曖昧 (ambiguous)」を挙げている。「一からの異義」は、中核的な意味とそれに従属する周辺の意味に基づく多義的な意味連関を有する表現に用いられるものである。例えば、「～は健康的である」という語が豆腐について言われる場合と、特定の人物について言われる場合があるが、これを特定の実体が健康的であるという意味が中心であり、それとの関係において従属的に豆腐が健康的であるという意味が生まれていると考えるならば、これは「一からの異義」の例となる。対して「類比」は、上の「健康的」の例のように中心的な意味を措定せず、複雑な意味連関の網を考える場合がそれである。また他方、「曖昧」は、多義的ではあるがそれらの意味の間に密接な意味連関を有さない表現に用いられ（これは筆者の言葉で言えば、「完全な多義」ということになる。）、「類比」あるいは「多義」は密接な意味連関を有する表現に用いられるとされる。[注3]

ここでのポイントは、McDanielが「存在」述語あるいは存在量子子に対して「類比的」と言うことで、多元的な存在の意味に対して暗黙裡の連関を認めようとしている、ということであり、この点がHirshのような量子子に関する完全な多元主義者とは異なる点である。以上をまとめると、McDanielの存在論的多元主義は、Hirshの立場と比較すると①最良理論における量子子の、世界の基礎的構造に関する含意を認める点、②多元的な量子子に対して類比的な意味連関を認める、という二点において異なる。

また、Siderなどの一元主義とMcDanielの多元主義についてももう少し整理しておこう。両者はいずれも上述の「最良の理論における量子子の世界の基礎的構造に関する含意を認める」という点において共通するが、「世界の基礎的なレベルにおける存在領域を単独とするか複数とするか」という点において異なる。この対立点についても、先述の分析形而上学の流儀に倣って、言語レベルでの「量子子の種類を本質的に単独とするか複数とするか」という問題を通じて議論が展開されている[7][12]。

### (3) 筆者の主張

以上のような議論状況に対しての筆者の主張としては、まず一見して分かるように、議論が非常に複雑化しており見通しが立ちにくい点が問題である、という点がある。既に述べたように、分析形而上学においては言語レベルでの論理的分析を通じて存在の問題を探求する、という流儀は伝統的でありスタンダードである。しかし実際のところ、この「存在論的一元主義か多元主義か」という問題に対しては本質的には量子子を持ち出さなくとも考察は可能であるように筆者には思われる。

例えば、J. Schafferは存在の基礎づけ関係 (grounding relation) に注目する形而上学理解を示した[9]の中で、量子子の問題を導入することなく自身の存在論的一元主義の立場を規定している。すなわち、形而上学的な世界の構造として「平らな構造」、「分類された構造」、「順序づけられた構造」の三つの種類を導入し、「順序づけられた構造」で

かつ分類された構造でないものとして自身の立場を位置付けている。すなわち、平らな構造とは世界の内に基礎づけ的な構造を認めず、かつ一つのカテゴリー（ここでは、存在および存在者の分類的領域）しか認めない立場であり、分類された構造とは世界の内に基礎づけ的な構造を認めず、複数のカテゴリーを認める立場であり、順序づけられた構造は世界の内に基礎づけ関係の階層を認める立場である。このように、量子子の問題を導入せずとも存在論の問題自体は定式化可能であり、議論可能である。

また、量子子の意味についての対立にしても、Siderは単独最良の量子子の意味があるとする立場、McDanielの類比的な量子子の意味を認める立場、Hirshの完全に多義的な量子子の意味という複数の立場があるが、それらの形而上学的な領域への含意を問題にするかぎり、それらの間の優劣を決定するのは最終的に存在論的な考察であろうと思われる。例えば、「ある抽象的な数が存在する」という文を論理式の形に表す時に、一方では、パラフレーズする先の理論のうちに基礎的な量子子としては無制限量子子「 $\exists x$ 」のみを認め、他の量子子を認めずに、それと「 $x$ は抽象的である」を意味する述語「 $Ax$ 」、「 $x$ は数である」を意味する「 $Nx$ 」を用いて「 $\exists x(Ax \ \& \ Nx)$ 」と表す仕方がある。他方では、基礎的な量子子としては全ての抽象物かつ抽象物のみそのドメインに含む原始的な制限量子子「 $\exists^*x$ 」と全ての具体物かつ具体物のみそのドメインに含む原始的な制限量子子「 $\exists'x$ 」のみを認め、前者を用いて「 $\exists^*xNx$ 」と表す仕方がある。このとき、両者は同じく「ある抽象的な数が存在する」を事実を表しているが、前者のパラフレーズを選ぶ場合、Siderのように単独最良の量子子の意味に応じた単一の存在領域があるとする立場と親和的となり、後者のパラフレーズを選ぶ場合、McDanielのように複数の量子子の意味に応じた複数種類の存在領域があるとする立場と親和的となる。従って、事実を記述する理論の選択肢はパラフレーズの仕方に応じて複数あり、存在論的探究のためにいずれを選択するかと言う事に関しては、何らかの基準が必要であると思われる。そして、そのような選択に関しての基準を与えるのは、結局それが存在のあり方をよく捉えているかどうか、ということになると筆者には思われる。そうであるとすれば、むしろダイレクトに存在論的な議論として、存在のあり方、世界の構造というものを考察した方が見通しが得やすいと思われる。

以上のことから、以下は存在論的多元主義に関して、量子子についての問題は扱わず、存在のあり方レベルでの議論に限る事とする。その上で、J. Schafferの提示した世界の構造の区別を土台として議論を進めたい。まず、Schafferの三図式を前提とすると、存在論的多元主義は「分類された、順序づけられた構造」ということになるだろう。つまり、Schafferの図式でいうと「分類された構造」と「順序づけられた構造」は両立可能であり、順序づけられた構造のうち、基礎的なレベルでのあり方において複数のカテゴリーがあると見なすものが存在論的多元主義、ということになる。これに対して、基礎的なレベルでのあり方を単一カテゴリーのものと見なすものが存在論的一元主義、ということになる。

Schaffer自身は、順序づけられた構造について、基本的には一元主義的なものしか検討はしない[9]。というのも、Schafferによれば多元主義的な「分類された、順序づけられた構造」は、さらなる基礎づけ関係の導入により一元主義的な「順序づけられた構造」に帰することができるからである。つまり、世界の基礎的なレベルでの複数カテゴリーを、よ

り基礎的なレベルでの単一カテゴリーからの複数の基礎づけ関係による派生と見なすことができるだろう、ということである。

しかし、この点についてはSchafferは単に一元主義的な構造が正しいという自身の立場を述べているだけであるのか、多元主義的な構造であってもつねに一元主義的な構造からの基礎づけ関係による派生型という形に還元できると主張しているのか、明らかではない。前者であれば、筆者が思うに、それは単純にSchafferの独断であり、後者であれば、多元的な基礎的なカテゴリーの構造をより根源的な一者からの派生と見なせる、という主張自体が検討を要する問題であろう。後者のように「基礎的な」レベルでの多元的なカテゴリー構造をSchafferがいうような形で一元主義的構造に還元するのであれば、少なくともその「派生」を実現する基礎づけ関係が複数種類なければならない。そうでなければ、McDanielがそもそも主張しているカテゴリーの「多元性」自体の本質を取りのがしていることになってしまうであろう。しかし、そのような複数種類の基礎づけ関係を導入することは、McDanielのように複数の基礎的なカテゴリーを認める事と本質的に何が異なるのか、明らかではないように思われる。少なくとも、新たに導入された根源的一者と、複数種類の基礎づけ関係の内実が明らかにされねばならないだろう。従って、Schafferのように一元主義的な構造を自明と見なす事は現時点では妥当ではない。世界の基礎的なレベルでのあり方に関する存在論的一元主義と存在論的多元主義は、少なくとも現時点では同等の候補と見なされるべきであろうと思われる。

また、本稿の整理で言えば、存在論的多元主義においてもMcDanielのように基礎的あり方について「類比的」であると見る立場と、それぞれのカテゴリーが独立しており完全に「多元的」であると見る立場、McDanielが「一からの異義」と呼ぶ関係により捉える多元主義的立場がある。この「一からの異義」的立場は、SiderやSchafferのような存在論的一元主義者とMcDanielのような「類比的」多元主義者の中間のような立場となるだろう。つまり、世界の基礎的レベルでのカテゴリーの一元性・統一性が強い方から順に、SiderやSchafferのような一元主義、「一からの異義」的な多元主義、McDaniel流の「類比的」多元主義、完全な多元主義、という並びとなる。このように整理すれば、現在の存在論的一元主義と存在論的多元主義の対立も、かなり見通しが良いものとなるだろう。

その上で、問題となるのはMcDanielのいう「類比的」の中身である。McDanielはこの「類比的」の内実については深く述べてはいないが、「一からの異義」のように中心的な意味が措定されるものではない仕方で、何らかの連関があるものとしている[6]。この「類比的」の内実、および世界の基礎的なレベルでそれが成り立っているかどうか、存在論的一元主義と存在論的多元主義の優劣を決定するところであり、また探求の実質的な争点であろうと思われる。したがって、まずは「類比的」概念の解明という哲学的な仕事が必要である、ということと言えるだろう。

#### (4) 今後の展望

今後の展望としては、まず既に述べたようにMcDanielの言うような「類比的」概念の解明という課題がある。McDanielの「類比的」あるいは「総称的意味」概念は、トマス・アクィナスやハイデガーの哲学からインスパイアされたものとなっており、また定義不可能な意味連関という点はウィトゲンシュタインの「家族的類似性」を思わせる。要するに、

哲学史上ですでに近い議論が何度も現れている概念である。この「類比」概念の内実をより明らかにしておく事が、存在論的多元主義にとっては重要な課題であると思われる。

注1：主に中期カルナップの立場を指すもの、新カルナップ主義者によるもの、K. McDanielによるもの等がある。

注2：Hirshの立場は量子化子変動（quantifier variance）と呼ばれる。

注3：正確には、McDanielは[6]において総称的意味をもつ場合を「類比」とし、そのうち複数の意味をもつ場合を「曖昧」とし、曖昧のうちで複数の意味の間の密接な意味連関がある場合を「多義（polysemous）」とし、多義のうちで中心的な意味が存在する場合を「一からの異義」とする、というようにも整理している。他方、ある表現が「一からの異義」かつ「類比的」であることはないと述べるなど、やや整理に不明な点が見受けられる。ここでの筆者の再整理は、McDanielが念頭に置いていると思われる区別を分かりやすくする為に、上の意味での「類比」と「多義」を同一視した上で、類比、一からの異義、曖昧を相互排他的なものとして捉え直したものである。これは[6]に忠実であろうとすればややミスリーディングということになるが、正直なところ筆者には上述のMcDanielの整理の利点が理解し難く、あまりに煩雑と思われたので、このように整理し直した。

（東京大学）

## (5) 参考文献

- [1] Berto, F. and Plebani, M. (2015). *Ontology and Metaontology: A contemporary Guide*, London: Bloomsbury.
- [2] Chalmers, D., Manley, D. and Wasserman, R. (ed.) (2009), *Metametaphysics, new essays on the foundations of ontology*, Oxford University Press.
- [3] Chalmers, D. (2009). 'Ontological Anti-Realism', in Chalmers et al. (ed.) (2009).
- [4] Hirsh, E. (2003). 'Quantifier Variance and Realism', *Philosophical Issues* 12 (1): 51-73.
- [5] Hirsh, E. (2009). 'Ontology and Alternative Language', in Chalmers, Manley & Wasserman (ed.) (2009).
- [6] McDaniel, K. (2009). 'Ways of being', in Chalmers et al. (ed.) (2009).
- [7] Manley, D. (2009). Introduction: A Guided Tour of Metaphysics, in Chalmers, Manley & Wasserman (ed.) (2009).
- [8] Quine, W. V. (1948). 'On What There Is', *Review of Metaphysics* 2:21-38.
- [9] Schaffer, J. (2009). 'On What Grounds What', in Chalmers et. al. (ed.) (2009).
- [10] Sider, T. (2009). 'Ontological Realism', in Chalmers et. al. (ed.) (2009).
- [11] Sider, T. (2011). *Writing the Book of the World*, Oxford University Press.
- [12] Tahko, T. E. (2015). *An Introduction to Metametaphysics*, Cambridge

University Press.

- [13] van Inwagen, P. (2009). 'Being, Existence, and Ontological Commitment', in Chalmers et al. (ed.) (2009).